

## □ 作曲

## 石塚潤一

昨年に続いて、多くの芸術音楽の公演がAFF2 (ARTS for the future! 2) によって支えられた。そもそもこの補助金は、創作の奨励に特化されたものではなく、新型コロナで疲弊した演奏家とその関連事業者（それはホールであったり、マネージメント会社であったり、演出や舞台関係者であったり、ポップミュージックでは音響や照明などの担当者も）を、演奏会の開催を通して補助していくものである。つまり、演奏会というパッケージが、ある程度適切な金銭の分配を担保していく、という期待に立脚したものだ。通常の助成とは異なり、演奏会開催にかかる経費の大部分を補助するものであり、よって、これに採択されたならば、開催側の金銭的なリスクは小さくなる。本年は、昨年実施分比べ、コンサートの規模に応じて補助額の上限が設定されるなど、幾つかの改変があったが、同一企画団体が実施する複数の公演への補助が行われ、この補助に助けられた団体は多かった。私事ながら、筆者も2つの企画団体に属し、昨年は5公演を制作したが、うち4公演にてAFF2からの補助を受けている。こうした補助に浸かることで、集客集金等の自動努力が疎かとなるのではないかと、という危惧も確かにあろう。ただそれでも、海外で活躍する、実力はあれど日本国内では知られていない作曲家の作品を紹介する場合など、こうした補助でもなければ相当の赤字を覚悟しなくてはならないのが実状である。ファースト・ペンギンとなるのは、金銭的痛みを伴うものなのだ。

コロナ禍は未だ続く。2021年末の時点でのコロナ死者は18,385人。これが22年の年末には57,266人へ膨れ上がった。さらに2023年の最初のひと月で1万人を超える死者が出る惨状が続いている。新型コロナを5類と分類しても、ウィルスの性質が変わるわけではない。まだまだ何らかの対策を行いつつ活動する日々が続くだろう。こうした状況を受けて、AFFに似た公的補助が継続されるなら、その運用については更なる調整が必要だろうが。

ここからは個別のコンサートについて見ていこう。2021年に比べると、コンサートが延期・中止となるケースはかなり減った。これはワクチンの効果に違いない。ただ、演奏家あるいは近親者のコロナ感染により内容変更の決断を迫られたコンサートの話は、しばしば聞き、音楽家の活動における潜在的なリスクとしてコロナの影響はまだあることに気付かされる。

当欄でしばしば言及する、東京圏の現代音楽コンサート・イベントをまとめた情報サイト「現代音楽イベントカレンダー」に登録された情報は418件。うち、特に演奏会が集中した12月のイベントが55件あった。

新作委嘱を積極的に行っている演奏家の活動より概観しよう。まず合唱指揮の西川竜太は、自らが指揮する4つの団体で、年に9作品を委嘱するものが通例だったが、コロナ禍によりアマチュア団体である3団体の活動が縮小し、昨年はヴォクスマーナで6作品（鈴木純明、鈴木治行、川島素晴、椎葉ふう香、伊左治直）を委嘱初演するに留まった（3/20、9/29）。鈴木治行に関しては、西川は上で言及したアマチュア団体を含めた4団体総出演による、「合唱作品による個展」（10/10）も開催した。還暦を迎えた鈴木は、自身が企画に携わる公演でも新作を発表する（5/11、9/21）など、その独自の時間構造をもつ創作で知られる存在である。コンテンポラリーなレパートリーに恵まれない金管楽器：ユーフォニアムの奏者である小寺香奈は、徳永崇、稲森安太己、松平頼暁の3人に、二作品ずつ（ユーフォニ

アムとピアノ、ユーフォニアムとクラリネット）の委嘱を行い、これを自身のリサイクルで披露（2/7）、現音のペガサスコンサート（12/8）でも鈴木治行を初演した。ROSCOは、ヴァイオリンの甲斐史子とピアノの大須賀かおりのデュオで、結成20周年を記念した公演で、桑原ゆう、大胡恵、北爪裕道、夏田昌和への委嘱新作を初演（2/11）。夏田昌和の新作はギタリスト土橋庸人の公演でも初演される（11/7）など、ますます充実している。ROSCOは、川島素晴が彼女らをゲストに開催した個展でも、4分音を含む音組織を、川島らしいユニークなアイデアを作品へ落とし込んだ新作で存在感を示す（9/2）。91歳の超ベテラン松平頼暁の個展は、昨年は2度開催され、未初演の旧作がそれぞれの公演で初演（2/18、12/1）、特に、12月の作品は、演奏時間40分に及ぶピアノ作品で、創作の総決算ともいえる力作といえよう。ピアニスト井上郷子は、アメリカ実験音楽のスペシャリストという視点から作曲家を厳選し、今年はそのリサイクル（3/6）を、星谷文生、黒田崇宏への委嘱作を含む二人展とした。演奏時間40分に亘るが音数が極めて少ない黒田作品が異様。星谷は5月に渡辺俊哉との二人展（4/28）を、11月には個展（11/1）を開催。黒田は、クラリネット三重奏に焦点を当てた2回の公演（10/28、11/30）を企画制作するなど、公演企画者としても頭角を現しつつある。黒田も参加した、森紀明と東俊介が関わるCrossings × zer〇は、ダンサーによる「演奏家を介さない演奏会」を開催。ダンサーの動きを作曲家ならではの目線で規程していくという、かなりユニークな試み。後閑綾香の作品も（5/3-4）。作曲家の個展では、昨年のオペラ「記」公演の管弦楽メンバーを結集させ自身の協奏曲を披露した西澤健一（10/13）、井上郷子による田中聰（10/21）、自身の「甲斐」シリーズを集め新作も披露した川上統（10/23）、全7作品が日本初演であったドイツ在住の山口恭子（12/12）、「ハードエッジな弦楽四重奏」の究極をいく飛田泰三（12/13）などもそれぞれに評判となった。川上は、神奈川県立ホールC×Cでサン・サンスとカップリングされ、川上版「動物の謝肉祭」ともいべき作品を披露（1/9）。C×Cには、山根明季子をケージと組み合わせる回もあった（9/10）。パルトンの松平敬とチューバの橋本晋哉による低音デュオは、西村朗が自ら台本を書いているモノオペラを初演（4/27）。橋本は自身のリサイクルを、内部奏法を含むピアノ伴奏のレパートリーというコンセプトにて開催（2/24）、木下正道を初演した。大規模公演に目を移すと、N響のMusic Tomorrowが、尾高賞受賞作品である西村朗、岸野末利加に加えて、細川俊夫への委嘱新作を演奏。だが、コロナ感染や急病でソリスト2人が来日出来ず、あわやという事態ともなった（7/1）。オーケストラ・プロジェクトでは、森垣桂一、山内雅弘、阿部亮太郎、土屋雄の4人がそれぞれの持ち味を如何なく発揮（11/17）。作曲コンクールでは、ファニーホウが審査する武満徹作曲賞を室元拓人が（5/29）、サントリー芥川也寸志作曲賞を波立裕矢が（2/7）受賞。日本音楽コンクール作曲部門を制したのは石川健人だが、本年も作品を演奏しての審査は行われていない。JFC作曲賞は小栗舞花（3/31）、現音作曲新人賞は井上莉里が受賞（12/5）している。

昨年は、野田暉行（9/18）、一柳慧（10/7）が亡くなり、その遺作ともいえる作品がそれぞれ岡田博美のリサイクル（11/26）、読売日本交響楽団の定期（10/25）で披露された。一柳の逝去は、神奈川県民ホールでのフィリップ・グラスのオペラ「浜辺のアインシュタイン」公演（10/8-9）前日のもので、会場には衝撃が走った。いわゆるミニマルの傑作とされるが、通常の指揮者のレパートリーとはまずならない当オペラの公演は、神奈川県芸術文化財団の芸術総監督である一柳の肝煎りで実現したもの。現代芸術の守護者としての一柳の不在は、今後ますます強く意識されることになるだろう。また、JML音楽研究所の所長として、後進の勉強と交流の場を担保した入野義朗未亡人で作曲家：入野禮子（10/29）も亡くなり、海外からはジョージ・クラム（2/6）、ハリソン・パートウィッスル（4/18）、ハンス・ヨアヒム・ハスボス（7/20）の訃報も届いた。